

「戦争論」

目次

- 1 はじめに
- 2 筆者の紹介
- 3 概要の説明
- 第一部
- 4 戦争の定義
- 5 戦争の形態
- 第二部
- 6 戦争の性格
- 7 提言
- 8 おわりに

1 はじめに

「人は何故戦争をするのか？」これは誰もが抱いたことがある疑問ではないだろうか。人類の歴史には常に戦争の影が付きまどってきた。そして、そのもたらすところの結果は常に悲惨である。夥しい数の人間の死、文明の破壊、環境破壊……。

いったい何故戦争は起こるのか？戦争のない世界を実現する方法はないのか？この問いの答えを知るためには、まず戦争とは何か、また何故人間が戦争をするのかを知ることが重要である。なぜなら、それを知らずして我々と戦争が決別する方法を知り得ないからである。換言すれば、我々が戦争とは何か、何故人間は戦争をするのかを理解すれば、戦争を拒絶し、戦争と永遠に袂を分かち方法を、あるいは知り得るかもしれない。

本書は戦争の性質と人間が戦争に導かれる心理を实によく考察している。本書の紹介は、聴衆各員が戦争の性質と人間が戦争をしてしまう心理の理解を促進し、戦争のない世界の実現を考える際の一助になると期待している。

2 著者の紹介

本書の筆者であるロジェ・カイヨワはフランスの社会学者・哲学者である。彼の研究は戦争・神話・夢・遊びなど多岐に渡るが、これらテーマで一貫して探究されているのは「人間の在り様」である。軍事に関しては専門知識を殆ど持たないが、歴史、政治、社会学に造詣が深い。

3 概要の説明

本書は二部構成である。第一部において、戦争を形式と規模によって3つの形態に分類し、

各形態の戦争が如何なる特質を持つかを明らかにした上で、戦争の形態と国家の発達が密接に関連していることを論じる。第二部において、人間が戦争を志向し、また魅了される心理を明らかにした上で、戦争から人間を解放する手段を提示する。

第一部

4 戦争の定義

戦争について論ずるには、まず戦争とは何かを定義する必要がある。しかし、これは容易ではない。なぜなら、戦争の形態は時代や文明・国家の発達度合いによって、その様相を大きく異にするからである。原始の時代においては、石槍と石弓を用いた小規模な局地的紛争から、現代においては、インターネット空間で繰り広げられる電子戦まで様々である。本書においては、まず戦争を「公共性を持った社会集団同士による抗争状態」と抽象的に定義している。次に、戦争を形態によって 3 つに分類し、各形態の戦争に具体的な定義を付与している。

5 戦争の形態

戦争は時代・場所に関わらず、①原始戦争・②貴族戦争・③帝国戦争の 3 形態に分類される。

本章では、各形態の戦争について説明する。

①原始戦争

もっとも初期段階にある戦争である。戦争はムラ、クニなど国家以前の部族集落を主体とし、まだ組織的・常備的な軍隊を有さないので、ムラやクニの首長が成年男子を招集して行うのが一般的である。兵士となる成年男子は、平時は狩猟や農耕に従事した。

戦争の原因は数多くある。食糧や奴隷の確保から敵対集落を服従・殲滅することを目的とする戦争もあれば、**<若者が、人を一人殺してからでなければ成年のうちに伍すことを許されない、といった社会>**において、慣習として行われる戦争もある。また、**<族長の威光を示す頭蓋骨の塚を作るため、戦争を行う交戦的な部族も存在する。>**このように、戦争の原因は、主体となる集団によって様々である。

戦争の行為も多種多様である。**<ののしりや打撃を早々に交わし合う単なる小競り合いをはじめとして、男という男を皆殺しにして、婦女子を連れ去り、村落を焼くような、殲滅的遠征に至るまで、様々である。>**凄惨な戦争の場合、略奪や虐殺は当たり前に行われた。さらに、軽微なものから凄惨なものまで、全ての原始戦争に共通するのは、反逆・夜襲は、ほとんどいつも行われるということである。原始戦争は規律や儀礼のない、無秩序な性格を有していた。

原始戦争は、国家が出現して法律・政治機構が整備され、文明の発展が進むと次第に消滅していった。次に主流となるのは、**<戦争に関する法を持ち、戦争のための固有の手段、すなわち規律を持ち訓練を積んだ軍隊が主体となる国家戦争である。>**この国家戦争は、さらに貴族戦争と帝国戦争の二つに大別される。

②貴族戦争

封建社会に見られる戦争である。戦争は貴族・騎士・武士といった上流階級を主体とし、また封建的な命令系統を有する軍隊を組織して行われる。まだ常備軍は殆ど存在しない。騎士や武士といった兵士は、主に出自によって階級が定められ、有事には戦地に招集され、平時には各自の領地で戦闘訓練に従事する職業軍人であった。

貴族戦争では（領土獲得など実質的勝利に加えて）名誉的・象徴的勝利を重視する。戦闘においては、一対一の決闘形式が好まれ、儀礼が重視され、武勇と技量によって勝敗が決定され、勝者は尊ばれた。また、殺戮よりも捕虜を捕ることが良いとされ、敗者は丁重に扱われた。反逆や夜襲は卑怯な手段として認識され、嫌われた。この規則は騎士道や武士道といった戦士の精神文化にも色濃く反映されている。

このように、貴族戦争が原始戦争とは明らかに異なる秩序ある性格を持ったことには理由がある。それは封建社会の発達によって、上流階級が戦争の主体となると、戦争において人員の喪失を忌避するようになったからである。戦争の主体が上流階級のみであるため、**<兵員の数は、事実上、はじめから限られている。それ故、兵力はできる限り温存しなければならぬ。訓練を積んだ軍隊は、一種の確実な資本である。この資本を、一つの戦で危険にさらしてしまうのは、狂気の沙汰とみられていた。>**このような理由で、互いに大量の戦死者を出すよりも、捕虜を金銭で交換しあう方が合理的であるというのが、上流階級の共通認識であった。

Ex マヌ法典

バラモン教時代（紀元前2世紀頃）のインドで作成されたマヌ法典によると、針の仕込まれた棒、とげのついた矢、毒矢といった卑怯な武器は、その使用が禁じられている。また、慈悲を願う者、髪のかざれた者、捕虜となることを願う者、寝ている者、鎧をつけていない者、裸の者、武器を持たぬ者、戦いに加わらぬ者、他の者と交戦している者、悔いに悩む者、重傷な者、卑怯な者、逃亡した者に対する攻撃は禁止されていた。

しかし、儀礼の対象は上流階級の者に限られ、一般の民に対しては、原始戦争と変わらぬ虐殺や略奪が行われた。一般の民もまた、上流社会の規律には従属せず、兵士に対して無法な行為を行った。**<戦争の規則は、同じ仕来りの下で育ち、それらの仕来りを重んずることを誇る者の間でのみ、意味を持っていたのである。>**儀礼を重んじる貴族戦争においても、戦争の悲惨さは何ら変わらないのである。

Ex 大阪夏の陣、落ち武者狩り

大阪夏の陣では、徳川方の雑兵が大阪の民衆を襲って金品を強奪したり、女性を暴行したり、偽首を取るなど狼藉行為を行った。(黒田屏風)

また、山崎の合戦で豊臣秀吉に敗北した明智光秀は、逃げ延びる途中に農民の追い剥ぎに遭って殺された。

③帝国戦争

強大な帝国が格下の国に対して行う戦争である。上流階級或いは国民を主体とし、組織的軍隊を以て行われる。中世においては、王朝政府による職業軍人で構成された非常備軍が主体であった。近代になると、市民社会の到来と共に国民皆兵の思想に基づく非職業軍人が中心の常備軍も組織された。

帝国戦争では領土の拡大や資源の獲得が最重要視された。また、覇権の拡大など象徴的な利も重視された。貴族戦争にみられた儀礼など皆無に近く、圧倒的な国力を持つ帝国が弱小国家を飲み込む蹂躞戦争であった。

帝国戦争にはプラスの面とマイナスの面が存在した。まずプラスの面として、実力差が明白であるから、帝国戦争の勝利は絶対的であった。そのため、戦争後には必ず平和が訪れ、特に弱小国については、帝国の庇護下に置いてもらうことができた。次にマイナスの面として、<帝国は弱小国に対して、帝国の持つ習俗、技術、制度、信仰、偏執、はては悪徳までも、学ばせあるいは強制した>ことにより、文化や民族の圧迫が起こった。しかし、<工業技術、制度、精神的価値の伝播>が後進国の発展を促進したことも事実である。

Ex モンゴル帝国

1206年にチンギス=ハンが創設した国家。最盛期には地球上の25%の陸地を支配し、一億人の人口を擁する大帝国に成長した。帝国版図の拡大は騎馬を用いた遠征戦争によりなされたが、この過程で20以上の国家を従属させ、10を超える国家を滅亡させた。まさに帝国戦争の王道である。余談であるが、モンゴル帝国の侵攻を完全に退けた国は日本とマムルーク朝エジプトの二国だけである。

第二部

7 戦争の性格

戦争は常に悲惨な結果をもたらす。にもかかわらず、人はなぜ戦争に魅了されるのか。

戦争には、人間を魅了する3つの要素がある。

- ・回復の手段
- ・解放の手段
- ・熱狂の手段

本章では、以上に述べた3つの特性について論じる。

- ・回復の手段

<戦争は、規律化された秩序ある通常の世界体制の下では解決が困難な問題に対して、一時的ではあれ、単純にして根源的な解決をもたらす。>

Ex 満州事変

1931年、日本軍が中華民国の領内にある柳条湖において、南満州鉄道を爆破したことに端を発する軍事紛争。当時、日本は資源の確保を目的として大陸に領土を獲得することを欲しており、中華民国東北部に位置する満州を帰属化におくことを画策していた。鉄道を爆破して、これを中国共産党軍の策略と偽り、鉄道権益を守るためと称して軍事行動を開始した。作戦は大成功を収め、わずか五か月で日本軍は満州全土を支配下においた。

満州の収奪は、平和のうちでは困難を極め、戦争という手段に訴えたからこそ短期のうちに成し遂げたのである。

<戦争という判決は、まがい物を消散させ、すでに命数が尽きてもはや習慣と慣れでしか生きていないようなものを排除する。武力のみがことを決するというこの絶対的な単純さは、無為な遁辞や説明を許容するものではない。戦争はその断固たる処置により、世界に若さと活気と真実を与え、政治に経済に新しい時代を開く。大きな混乱と大きな犠牲を起こして人間を疲労困憊させ、社会に活気を与え、もう役を果たして厄介となったような制度を社会から除去する。>

つまり、戦争は社会の変革と新陳代謝を促す効果を持っているということである。

- ・解放の手段

<戦争は人間を、一挙に野蛮状態に押し戻してしまう>

Ex ライタイハン

ベトナム戦争時、国連軍として派遣された韓国軍が現地の女性に対して働いた性的暴行によって生まれた子供。また、彼らが差別などを受けている問題。被害の総量は不明確で、ライタイハンの数は1500人とも30000人とも言われている。

<あらゆる兵士は、おのずと暴力に走り、残酷に走るものである。>それはなぜか？

それは、戦争においては<秩序や道徳を無視しても、逆にそれは榮譽のもとであり、栄光を与えるものでさえあった。>からだ。

Ex ベトナム戦争

「ベトコン」を殺すことは榮譽であった。

また、<手足を失い、負傷し、死ぬかもしれないという予想が、彼らの試練を聖なるものとする。>兵士にとって、祖国のために戦うことは名誉である。戦死はより名誉である。戦争は、称えられる暴力なのである。

そして、<戦争は文明人にとって、英雄となると同時に本能を欲しいままにすることのできる、主要なそしておそらく唯一の機会である。>

さらに、<戦争においては、文明のいろいろな規則は一時抹消され、人間は平時の生活様式から激しく自分を断絶する。><法と世論に屈従し、利益の追求に明け暮れる単調な生活から、兵士は解放される。>

つまり、戦争は人間に対して規律や秩序からの解放をもたらすのだ。

・熱狂の手段

戦争は、人間と社会に対して回復と解放の手段を与えるが、そのもたらすところは「熱狂」である。<戦争は社会の痙攣である。>戦争は、平和な社会においては除去が難しい腐敗した諸制度を取り除き、人間を理性から隔絶した自然な状態に戻す過程で、人間・社会に熱狂を与える。これはナショナリズムの高揚や、反戦運動に見て取れる。

Ex ナチス党大会・ベ平連

ナチスが政権を獲得したドイツにおいて、ゲルマン民族の絶対的な優位性を根拠にして、ドイツ第三帝国の復活を標榜するナチスの一連の侵略的戦争は熱狂を以て国民に受け入れられた。また、ベトナム戦争において、反戦を訴える運動が日本にも広がった。

戦争の生む熱狂は、戦争に賛同する者も反対する者も、地域を超えて、伝播する。

つまり、回復と解放の過程で、戦争は熱狂を引き起こすのだ。

・余談 酒と戦争

酒と戦争は多くの類似点を持っている。酒は、人間の持つ悩みや不安に対して一時的かつ根源的な解決を与え、疲労を回復させる。また、日常の規律から人間を自由にさせる。戦争が文明に打撃を与えるのと同様に、酒も人間に打撃を与えるが（二日酔い）、それでも人間は戦争を手段として用いることを続けるように、酒を「命の水」と呼んで崇拝することをやめない。

つまり、人間は酒に魅了されるように、戦争に魅了されるのである。

8 提言

なぜ今、戦争に注目するのか？それは、戦争の脅威が以前にも増して、全人類を脅かしているからである。

かつて、ムラやクニによる小規模な小競り合いや上流階級の占有物であった戦争は、民主主義社会の到来によって、全国民のものとなった。参政権という権利の付与と引き換えに徴兵制という義務が課されたことが象徴的である。民主主義は戦争を全国民のものとする事で、戦争の規模を拡大させた。さらに、戦争が国民的なものとなったことで、戦争と政治・経済との結びつきはより密接に、強固なものとなった。＜戦争はもはや、政治・経済・科学技術・産業のすべてを内包しており、これらは戦争のためにあるといっても決して言い過ぎではない。＞そして、戦争と科学技術・産業との結びつきの強化は、戦争の機械化を助長した。自動車・艦船・航空機が兵器として用いられるようになった。その結果、＜核兵器という遠距離まで届く大量殺戮の道具は、抗争を全地球的規模に拡大する役割を果たした。＞とあるように、科学技術の発展もまた、戦争の規模の拡大に寄与することとなった。

こうした戦争の規模の拡大は、より多くの人間を戦争の脅威にさらす結果となった。＜一個の原子爆弾は、その体積のなかに、多くの人間の労力を、何千という労働者に細かく分

担された膨大な労働時間を含んでいる。>すなわち、もはや一般人は兵士と同じく戦争の参加者であり、故に<一般人は軍人と同様に攻撃の標的となる。敵からみれば、一般人は兵士と同様に「敵」という危険な存在であるからだ。>もはや、戦争は戦場において兵士のみが行うのではなく、国民全てが参画せざるを得ない形態となってしまった。

しかし、身近にせまる戦争の脅威に立ち向かい、これを拒むことは容易ではない。<現代社会の複雑性は、人間の知的能力を凌駕するものとなった。>戦争の政治・経済との融合は、故に戦争の阻止を困難なものとしたからである。

もはや、全地球的規模に拡大した戦争を根絶するには、国家規模・地球規模の人間の意思が必要なのである。

そこで、筆者は一つの提言を行っている。

<戦争の本質と我々が戦争に魅了されることを理解させ、戦争と決別する道を考えさせる真の平和教育が必要である。>

9おわりに

日本の安全保障は大きな転換点を迎えている。集団的自衛権の行使が限定的ではあるが容認されたこと、中国や北朝鮮からの軍事的な挑発が増していることを鑑みると、日本人が再び戦争を国策の手段として用いらざるを得ない日が、あるいは近づいているのかもしれない。そう考えてみると、私は日本人の戦争観に大きな不安を感じてしまう。教育現場では、ただひたすら「戦争反対!」「平和が一番」と連呼するばかりで、例えば大東亜戦争を振り返る際、日本の政府・軍部を悪者として糾弾するばかりで、何故彼らが、大多数の日本人が戦争に賛同してしまったのかを深く掘り下げ、学んでいくことをしない。これでは戦争の廃絶に向けて思考を巡らせる素地が構築されず、価値ある実践的な教育がなされているとは言い難い。また、これは教育現場のみならず多くの日本人にも同じことがいえるのではないか。真剣に戦争をなくそうと試みるとき、思考の基軸を持つ日本人がどれほどいるだろうか。恐らく、ほとんどいないであろう。戦争を廃絶することは容易ではないが、それでも戦争のない世界の実現に向けて、戦争の本質を理解させることによって、国民の一人一人に戦争の廃絶に向けて思考を巡らせることを可能にすることは、決して無駄にはならないであろう。そんな努力の積み重ねが、いつか本当に戦争のない世界を実現すると、私は信じている。